

アメリカンフットボールの文化論 —選手たちに共有される秘密をめぐる—

A Cultural Study of American Football — On the Secret to be Shared among the Players —

石井 佑樹 (Yuki Ishii) 指導：蔵持 不三也

■研究の対象と目的

アメリカンフットボール（以下、アメフトと表記）という競技は、選手の鍛え上げられた肉体同士が激しくコンタクトしあう「格闘技性」とともに、緻密に計算された作戦を用いて陣地を獲得しあう「戦略性」がその基盤をなしている。陣地を獲得するための11人の動きが記された媒体のことを「アサイメント」と呼ぶ。そこには、チーム独自の創意工夫が至るところに施されており、アサイメントはいかなれば各チームにとって門外不出の重要機密だといえるだろう。本研究は、特に学生アメフトを対象とし、なかでもアサイメントに着目しつつ、スポーツコミュニティにおける「秘密」のもつ集団的特性に関して考察することを目的とする。

■研究方法

研究方法としては、文化人類学の研究手法である現地調査（フィールドワーク）に加え、文献調査を実施した。前者では、合計2013年から2015年にかけて2チーム（Xチーム：高校、Yチーム：大学）に対して参与観察をおこない、かつ7チームの出身者に対してインタビューを行うことでアメフトチームの実態について把握することとした。後者では、アメフト・秘密研究に関する文献を収集し、検討を行った。

■研究の構成

本研究は、5つの章で構成されている。第1章では、先行研究のレビュー及び問題提起を行った。従来の体育会や運動部に関するスポーツコミュニティ研究では、「上下関係」が構成員の関係性の基盤をなしている、という側面が強調されてきたように考えられる。しかし、互いに決して外部に漏らしてはいけない秘密を守り抜くことが連帯を強化する、という側面を検討することは、これからのスポーツ共同体、アメフト研究にとって十分に意義があることのように思われる。

第2章では、秘密・アメフトに関する概要を記述し、第3章の内容は本論文のいわば中核をなす。アメフトは、コンタクトスポーツである以上、体の大きい選手を揃えることが優位であることはいうまでもないが、同時にアサイメントをうまく選択することも重要である。相手の想定を超える奇策（スペシャルプレー）を駆使することにより一気

に得点することも可能である。また、アサイメントは厳重に管理されており、不特定多数の人間が存在している空間での閲覧は禁止されている。

アサイメントを全員に配布するチームがある一方で、「うちは実力を評価されないとアサイメントをもらうことはできない」という声も聞くことができた。もっともアサイメントを与えられた場合でも、試合出場の見込みが少ない選手は、スカウトチームという役割を担う。対戦が予想されるチームのアサイメントや選手の動き・クセを身につけ、スターターの実力向上に貢献する。

第4章では、アサイメントの機能分析を行った。アメフトチームにとってアサイメントは、集団的境界を生み出す装置であると考えられることができる。

■結論

アメフトチームには加入儀礼や昇級儀礼があり、内部にはある種の階層（スターター・スカウトチーム）が存在し、「生の情報」の流出を招く行為は禁止されていることから、たとえば綾部恒雄（2010）が概念を提起した「秘密結社」に準ずる性質を持つ集団と考えることができるだろう。しかし、アメフトチームでは秘儀が創られた当初より「公開」、換言すれば「消費」を目的とし、次々と「再生産」され、かつ「非神格化」がなされている点で、先行研究にみられる秘密結社の秘儀と一線を画すのもまた事実である。なお、「非神格化」とは、選手がアサイメントに過度に依存してしまうとトレーニングを怠りかねないために、指導者側がうまくコントロールしていたことを指す。

厳しい練習と果てない反復によって、試合にて使用されるまでになったアサイメントには構成員の感情が移入することが調査によって判明した。アサイメントは毎年見直され、破棄されるものもあれば、チーム内でそのまま継承され続けるものや、一部を改変して使われるものもある。時の経過とともに、構成員やユニフォーム、さらにはチーム名までも変わってしまう場合もあるが、過去のアサイメントを使用することで、過去と現在の構成員との関係性を確認することができる。アメフトチームにとってアサイメントとは、過去から継承されてきた秘密であり、1種の統合シンボルとして考えることができるだろう。